

私は群馬県で生まれ、育ちました。群馬県といっても、私が生まれ育ったのは群馬県の東部に位置するみどり市東町(旧勢多郡東村)というところで、山や川など自然が豊かでとてもものどかなところでした。小学校は、私が通っていた当時で各学年約20人、全校120人という、とても小さな学校でした。人数が少なかったので全校の児童がみんな友達で、上級生に遊んでもらったり下級生の面倒をみたり、一人っ子の私にとってはとてもよい環境でした。そして、中学校は、当時村内にあった3つの小学校の生徒が1つの中学校に通うという形だったので、各学年約50人、全校150人というやはり小さな学校でした。小学校のときは6年間1クラスしかなかったので、中学校で2クラスになり、とても大きな学校に通っているような気持ちになったことを覚えています。

中学校の教室からは、春は満開の桜や新緑に染まった黄緑色の山々、そして、スギ花粉の黄色い粉が飛ぶ様子などが見えました。夏は強い日差しが差込み、せみの鳴き声や虫の音が聞こえてきて、秋は赤や黄色に紅葉した山々が見え、冬は強い風が吹き、風に吹かれて風花が真横に飛んでいく様子や雪が降り、朝窓を開けると、真っ白な一面の銀世界を見ることができました。また、中学校に通うのも、ほとんどの生徒が電車通学でしたが、高校生になると全員が電車通学になり、電車から見える景色も、映画の撮影に使いそうなとてもきれいなところばかりでした。しかし、高校生になっても、当たり前にも目の前にあったものの美しさやありがたさに気づくことができなかったのです。このころの私は、「群馬脱出計画」を立て、群馬以外の場所に進学することを決めていました。こんな田舎にはいたくない、と実家から離れることばかりを考えていました。群馬は「田舎」と思い、群馬の良いところや群馬というところのことをよく知りもしないで、とにかく群馬から出てみればよいことがあるようなそんな気がしていて、どうしても出て行きたかったし、出ることにしか考えていなかったのです。

そして、大学生になり、希望通り県外の大学に進学しました。念願の一人暮らしで、家具や寝具、キッチン道具などを買い揃え、新居となるアパートを探し、夢と希望に胸をおどらせて生まれて初めての県外での生活が始まりました。それから間もなくして気がついたのは、両親への感謝の気持ちでした。毎日あたたかくおいしいご飯がでてきたり、洗濯機に脱いだ洋服を入れておくと、きれいになって返ってくることはありません。お風呂も自分で用意しなければ入ることができません。掃除をしなければ部屋は汚れるし、ごみを出さなければ家のごみだらけになってしまいます。また、毎月送られてくる仕送りや、高い学費などの金銭的な面でのことです。私は初めて、人が生活するのに、こんなにお金がかかるものなのだと気づき、両親に感謝の気持ちが持てるようになりました。

また、大学生になると出身地は全国各地にわたります。今までは群馬の人としか関わったことが

ありませんでしたから、群馬について考えることもありませんでした。自分の経験してきたことが一般的で、自分が今までいた環境がどこにでもあるような気がしていたのかもしれませんが。しかし、大学では群馬出身の人はほとんどおらず、群馬の人なら誰でも知っているような話題も通じないのです。そのような中で、群馬県の高校は他県と少し違うことに気がつきました。群馬県は私立より県立の高校への進学に関心が高いとされています。また、歴史の古い公立の高校は、今でも男子校と女子校に分かれているということです。他県では、男子校や女子校は私立でしかなかったり、公立より私立への進学の方が関心が高いのだそうです。このことを知ってから、なぜ、群馬県にはそうした学校が多く残っているのかということや、群馬の土地柄ということも知る事ができました。また、このとき初めて外側から見た群馬や、日本の中で群馬県がどのような認識されているのかという客観的な見方ができるようになりました。そして、群馬の良いところや悪いところ、また、群馬の特徴や群馬らしさを知ったとき、とても群馬が好きになりました。そして、私の生まれ育ったところは都会からは少し離れているけれど、その土地の価値は都会か田舎かではないこと、そして、私の生まれ育った場所が、どんなに良いところであったのかということに気がつくことができたのです。

現在、私は東京福祉大学に編入学し、福祉心理を専攻するとともに、養護教諭をめざして勉強しています。高校生の頃、あんなに群馬が嫌いで、出て行きたくて仕方がなかった私が、群馬県の教員を目指しているなんて、なんだか不思議な気持ちです。しかし、今の私は、群馬で群馬県の教育に携わり貢献していくことが目標です。そして、群馬県の教育力を日本中に誇れるよう貢献していくつもりです。教育というと、現在は不登校やいじめなどさまざまな問題が取りざたされ、教員が悪いとか、社会が悪いとか、親が悪いとか暗い話になりがちです。しかし、私は群馬の教育に明るい未来を感じています。

私は、今年の夏休みに“おおた 100km 徒歩の旅”という太田青年会議所の主催する事業に、ボランティアスタッフとして参加しました。この事業は、夏休みに小学生 100 人が親から離れ、4 泊 5 日をかけて太田市内を 100km 歩くという大きな事業です。私は、楽しそう、という安易な動機から参加することにしました。ボランティアスタッフには事前研修会があり、私は6月から月に2,3回ずつ行われた研修会に参加しました。その中では、当日に向けての準備はもちろん、あいさつや礼儀、仲間への思いやりや名札の着用を通して自分の存在をアピールすることなどの基本的なことから、積極性、協調性、考える力、楽しませる力、リーダーシップ能力、プレゼンテーション能力、子どもたちの命を預かるということの責任や子どもたちとの接し方まで学ばせていただきました。そして、臨んだ当日でしたが、最初は学んだ知識をなかなか実践できず、子どもたちとうまくかわ

れませんでした。しかし、子どもたちの名前も覚え、研修会の成果もあり徐々にうまくかわれるようになりました。

5 日間ではさまざまなことが起こりました。子ども同士のけんかや歩いている途中で歩きたくないと言い出す子もいます。そのときどのように声をかけるか、どのように接するのかなど、スタッフ同士で寝る間も惜しんで考えました。5 日間では入浴や睡眠も十分にはとれません。宿泊地は学校などの体育館をお借りして、寝袋で寝ます。また、スタッフは4時半に起床し、子どもたちを5時半には起こします。炎天下の中をひたすら歩き、歩きながら泣き出す子や疲労で足に痛みを訴える子をなんとか目的地まで連れて行きます。遅れてしまう子や、足を引きずりながら歩く子も出てきます。それでも、なんとか自分の足で目的地まで歩かせ連れて行きました。私たちスタッフですら、足の痛みや疲労から歩くのをやめたくなくなってしまうほど 100km 歩くということは大変なことでした。しかし、小学生の子どもたちは、一人もリタイアすることなく全員が 100km 完歩したのです。

1 日目に、「お母さんが荷物を用意してくれたから、どこに何が入っているかわからない」と言っていた子が、5 日目に洋服をたたみすべての荷物を自分でバッグにしまっていました。また、「バッグが重たくて持てない」と言っていた子が必死にバッグを運んだり、「足が痛くて歩けない」とダダをこねていた子が「明日はがんばって歩くね」と言ってくれました。自分のことで精一杯だった子どもたちが、遅れてしまった子に「がんばれ」と声をかけたり、好き嫌いの多かった子が「嫌いだけど 1 口だけ食べるね」と言って渋い顔をしながら嫌いなものでも食べるようになりました。子どもたちは、100km 歩ききったことだけでもすごいことなのに、そのほかの面でも大きな成長を見せてくれました。そして、子どもたちが成長したのと同じくらい、私たちボランティアスタッフも成長させていただいたし、貴重な経験をさせていただいたと感じています。そして、5 日目のゴールでは、子どももボランティアスタッフも男女問わず感動で泣きました。あんなに泣いたのは久しぶりだったし、あんなに感動したのも久しぶりでした。

この事業は、太田青年会議所の方々の力はもちろんですが、地域の方々のご協力があって初めて成り立つものだと感じました。疲れてしまって、やっと歩いている子に走って氷を届けてくださったり、快くお手洗いを貸してくださったり、道路に出て「ガンバレ」と応援してくださったり、本当に地域のたくさんの方々に支えられていました。地域の教育力は低下したといいますが、私は、この事業を通して、地域の教育力は低下したのではなく、地域が教育に関わるのが少なくなっただけで、低下ということではないように感じました。また、「今の子どもは…」と言われますが、“おおた 100km 徒歩の旅”に参加した子どもたちは、一人もリタイアすることなく、全員が歩きぬきました。私は子どもたちの“力”を見せてもらいました。

このように、群馬には民間にも地域にも立派な教育力があります。この事業が大きな意味を持ちたり成り立ったりするのは、群馬県の学校教育があつてのことです。学校教育という土台がしっかりしているからこそ、この事業は成り立ち、地域のたくさんの方々に応援していただき、いい事業だと言ってもらえるのです。現在は、教育というと、群馬県に限らず自殺や不登校、学級崩壊、教育課程の未履修など、さまざまな問題が取りざたされています。しかし、現在の教育は、悪いところばかりではありません。

私は、“おおた 100km 徒歩の旅”に参加し、研修会や4泊5日の中での私たちボランティアスタッフの成長、そして、子どもたちの成長を自分の目で見てきました。この事業は、群馬県の学校教育と地域の教育力に支えられているのです。私は、群馬の教育に自信と誇りを持てるようになりました。群馬の中にいたときは、群馬の魅力に気がつくことができず、一度外に出て、やっと群馬の魅力に気がつき、今は、群馬県の教育に携わり、貢献したいと考えています。群馬の子どもを、強くたくましく育て、明るい群馬の未来を作っていきたいです。